The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『六韜』における気の二元性
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 1997, 20, p. 20-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61261
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『六韜』における気の二元性

竹田健二
（島根大学）

序言

先に筆者は、兵家における気について検討を加えた。その結果、兵家における気は、士気の系統の気と望気の系統の気とに二分することができること、加えて、或る兵学においていずれの系統の気が専ら説かれるかは、その兵学の基本的立場が、天人相関思想に基づくものであるか否かによることを明らかにした（注1）。

そこで問題となるのが、『六韜』の存在である。十三篇『孫子』・『孫臏兵法』・『尉繚子』・『呉子』などの他の兵書においては、この二つの系統の気の内のいずれか一方のみが説かれていた。しかし、『六韜』においては、一書の中に両系統の気が共に説かれているのである。

本稿では、この『六韜』における気について検討し、それが古代中国における気の思想的展開においてどのような位置を占めるものであるのか、ということについて考察する。

第一章　『六韜』における気

本章では、先ず『六韜』における気について概観しておく。前述の通り、『六韜』においては士気の系統の気と望気の系統の気とが混在している。そこで、以下『六韜』における気をこの二系統の気に分類した上で、それぞれについて見ていくことにする（注2）。

先ず士気の系統の気、すなわち、人間の身体内部に存在し、人間の精神的作用を基本的に意味するところの気であり、特に軍事に関連して説かれた場合、兵士たちの戦闘意欲を指す気についてである。

（1）二に曰く、民の　農桑を事とせず、気に任せて遊侠し、法禁を犯歴し、吏の教へに従はざる者有らば、王の化を傷ふ。（中略）四に曰く、士の志を抗げ節を高くし以て気勢を為し、外に諸侯と交はりて其の主を重んぜざる者有らば、王の威を傷ふ。（文韜、上賢）

（2）文王　太公に問ひて曰く、文伐の法　奈何と。太公曰く、凡そ文伐に十二節有り。（中略）十一に曰く、之を塞ぐに道を以てす。人臣は貴と富とを重んじ死と咎とを悪まざる無し。陰かに大尊を示して微かに重宝を輸り、其の豪傑を収め、内積甚だ厚きも、外乏を為す。陰かに智士を納れ、其の計を図ら使め、勇士を納れて、其の気を高から使む。富貴甚だ足りて、常に繁滋有り。徒党已に具はる、是れ　之を塞ぐと謂ふ。国を有つに塞がるれば、安んぞ能く国を有たん。（武韜、文伐）

（3）行陳固からず、旌旗亂れて相ひ繞ひ、大風甚雨の利に逆らひ、士卒恐懼し、気絶えて属かず、戎馬驚奔して、兵車軸を折り、金鐸の声　下りて以て濁り、鼙鼓の声　湿りて沐するが如きは、此れ大敗するの徴なり。（龍韜、兵徴）

（4）敵人　若し来るも、我軍の警戒するを視れば、至りて必ず還らん。力尽き気怠れば、我が鋭士を発して随ひて之を撃たん。（虎韜、金鼓）

（5）鋭気・壮勇・彊暴なる者有らば、聚めて一卒と為し、名づけて陥陳の士と曰ふ。（中略）此れ軍の服習にして察せざる可からざるなり。（犬韜、練士）

『六韜』中には、軍の指揮官に対して、士気を適切に把握し、その士気のあり方に応じた行

動を取ることを求める思考が見られる。

すなわち、資料5では「鋭気・壮勇・彊暴なる者」を「聚めて一卒と為」すこと、つまり特に高い士気を保持し、勇敢で果敢な行動がとれる兵士からなる部隊を編成する必要が説かれている。また資料3では、「士卒恐懼し、気絶えて属か」ざる状況が、「大敗の徴」であると警戒されているのである。

もちろん、個々の戦闘や戦争において勝利を得るためには、指揮官は敵軍の士気についても的確に把握し、それに対応しなければならない。資料4では敵軍が「力尽き気怠んでいたならば、まさに「我が鋭士を発して、随ひて之を撃」つべき好機と位置づけられ、また資料2で、武力を用いず謀略によって敵国を倒す場合、意図的に敵国内の「気を高から使む」こともあるとされるのは、このためである。

このように、指揮官に対して気の適切な把握や操作の必要を説く資料において説かれている気は、兵士たちの士気を意味するものに他ならない。

資料1における気は、軍事には直接結び付けられてはいないが、やはり人間の精神的作用を指すものであり、士気の系統の気に属するものと考えられる。すなわち、ここでは「気に任せて遊侠」することが「王の化を傷ふ」悪事の一つとして位置付けられている。ここからは、人間はその身体内部にある気を放任してはならず、その気が或る一定の秩序を保った状態で存在するよう絶えず努力しなければならない、とする思考を窺うことができ、しかも「気勢を為」すことが「志を抗げること、つまり志のあり方と結びつけられている。従って、この気もやはり人間の精神的作用を指すと考えられるのである。

以上のような『六韜』中の士気の系統の気は、十三篇『孫子』や『孫臏兵法』、『尉繚子』に見られる士気の系統の気と、同一であると見なし得る。

続いて望気の系統の気、すなわち、基本的に

人間の身体内部ではなく外界において存在し、観察の対象となるところの気について見てみよう。

（6）天文三人は、星暦を司り、風気を候し、時日を推し、符験を考へ、災異を校し、天心去就の機を知るを主る。（龍韜、王翼）

（7）凡そ城を攻め邑を囲むに、城の気、色死灰の如くんば、城屠る可し。城の気　出でて北すれば、城克つ可し。城の気出でて西すれば、城必ず降る。城の気出でて南すれば、城抜く可からず。城の気出でて東すれば、城攻むる可からず。城の気出でて復た入らば、城主逃北す。城の気出でて我が軍の上を覆わば、軍必ず病む。（龍韜、兵徴）

（8）太公曰く、其の鼓を聴くに音無く、鐸声無く、其の墨上を望むに飛鳥多くして驚かず、上に氛気無ければ、必ず敵の詐りて偶人を為るを知らん。（虎韜、墨虚）

（9）武王太公に問ひて曰く、「凡そ用兵の極は、天道・地利・人事、三者孰れか先にせん。」と。太公曰く、「天道は見難し。地利・人事は得易し。天道は上に在り、地道は下に在り。人事は飢飽・労逸・文武を以てするなり。故に天道に順ふも必ずしも吉有らず、之に違ふも必ずしも害有らず。地の利を失はば、則ち士卒迷惑す。人事和せざれば則ち以て戦ふ可からず。故に戦ひは必ずしも天道に任せず、飢飽・労逸・文武最も急なり。地の利　実為り。」と。王曰く、「天道・鬼神は、之に順ふ者は存し、之に逆ふ者は亡ぶ。何ぞ以て独り天道を貴ばざるや。」と。太公曰く、「此れ聖人の生ずる所なり。以て後世に止めんと欲す。故に譎書を作為して勝を天道に寄す。兵　勝に益無くして衆将　拘る所の者、九あり。」と。王曰く、「敢へて問はん、九とは奈何。」と。太公曰く、「法令行はれずして侵誅に任す。徳厚無くして日月の数を用ふ。敵の強弱に順はずして、天道に幸す。智慮無くして氛気を候す。勇力少なくして天福を望む。地

形を知らずして過（わざはひ）（禍）に帰す。敵人怯ゆるも、敢へて撃たずして亀筮を待つ。士卒募らずして鬼神に法る。設伏巧ならずして背向の道に任す。凡そ天道・鬼神、之を視れども見えず、之を聴けども聞えず、之を索むれども得ず。以て勝敗を治む可からず、死生を制する能はず。故に明将　法らざるなり。」と。（『群書治要』巻三十一所引の龍韜佚文）

(10) 桀　山陵を鑿ちて之を河に通ぜんとす。民諫むる者有りて曰く、冬に地を鑿ち山を穿つは、是れ天の陰を発して、山の気を泄らす。天子後に必ず敗れん。」と。桀　妖言なるを以て之を殺す。（『太平御覧』巻八十二所引の『六韜』佚文）

(11) 金器自ら鳴り、焦気に及ぶは、軍疲るればなり。（『太平御覧』巻三百二十八所引の『六韜』佚文）

資料7では、攻城戦の際に城邑の上空に現れる気の色彩及びその移動の方向を観測することによって、戦闘の結果などが予知し得るとされる。そして資料6では、そうした気の観測が、「星暦を司」ることや「時日を推」すことなどと並んで、「天文」を司るものの職務であったことが示されている。つまり、王者の軍事に関する補佐役たる臣下の内、天文の職分に「風気を候（うかが）」うことが含まれているのである。

こうした気や風気は、人間の精神的作用を意味する気とは異なり、外界に存在して観察の対象となるものであって、陰陽流兵学の構成要素の一つであるところの、望気の気である。

資料8も資料7と同様に、敵の鼓鐸の音響の観測と併せて、「氛気」を含む墨上の状況を観測することで、直接確認することのできない敵軍の存否を察知することができることを説くものである。資料11は佚文であるが、そこでは、「焦気」なる気が「金器自ら鳴」ることと関連付けられ、しかも「軍疲るればなり」との兵士たちの状況を判断する材料とされている。ここから、この焦気は、資料8の気と同様に、陰陽流兵学

の構成要素である聴声と望気とに直結する気であると推測される。

やはり佚文である資料10では、殷の桀王が「山陵を鑿ちて之を河に通ぜん」としたことを諫める或る民が、かかる王の行為が「天の陰を発して、山の気を泄らす」ものであり、従って「天子後に必ず敗れん。」と、将来の王の末路を予言する。ここでの「山の気」は、やはり人間の精神的作用を意味するものではなく、外界に存在し天地間の自然現象を構成するものである。そしてそうした天地間に存在する気のあり方を、王の行為と関連付け、そこから未来の事象を予言せんとする思考は、基本的に望気に基づく発想である。

資料9も佚文であるが、太公の発言中に、「氛気を候ふ」ことが挙げられている。この表現は資料6及び8に極めて類似し、これも望気に他なるまい。

但し、この資料において太公は、基本的に「戦ひは必ずしも天道に任せず、飢飽・労逸・文武最も急なり」との、人事重視の立場に立つ。すなわち、「氛気を候ふ」ことは、「日月の数を用ふ」ること、「天道に幸す」ること、「天福を望むこと、「過(わざはひ)に帰す」ること、更には「亀筮を待」つこと、「鬼神に法る」こと、或いは「背向の道に任す」ことと並べられている。そしてそれらは、「天道・鬼神は、之に順ふ者は存し、之に逆ふ者は亡ぶ」とする立場、すなわち陰陽流の兵学の構成要素と規定された上で、「以て勝敗を治む可からず、死生を制する能は」ざるものとして、厳しく批判されているのである。

こうした立場は、これまで見てきた資料6・7・8・10・11の立場とは、全く逆である。すなわち、『六韜』中の望気の気を説く資料の中には、陰陽流兵学に基づき望気を肯定する立場からのものと、それを否定する人為重視の兵学に基づく立場からのものとが混在するのである。この点については、次章で述べる。

以上、『六韜』における望気の系統の気について見てきたが、それは専ら外界に存在する気を

観測することによって未来の事象についての予知を行わんとするものであり、馬王堆漢墓出土の『天文気象雑占』、或いは『墨子』迎敵祀篇などに見られるものとほぼ同一である。

この望気の系統の気と、先に見た人間の精神的作用を指す士気の系統の気とは、同じく気であるとされてはいるものの、かなり性格が異なる。そして、先述の通り、十三篇『孫子』・『孫臏兵法』・『尉繚子』・『呉子』などにおいては、この性格が異なる二つの系統の気がともに説かれることはなかった。

それでは、『六韜』中に二つの系統の気が混在して見られるのは如何なる事情によるのであろうか。次章において、この点について検討することにする。

第二章　天人相関と天人分離と

先にも触れたように、或る兵学において士気と望気のいずれの系統の気が説かれるかは、その兵学の基本的立場が、天人相関思想に基づくものであるか否かによる。すなわち、天人相関に基づく陰陽流兵学を説くものが、専ら望気の系統の気を説く。それに対して、天人相関を否定し、あくまで人事を尽くすことによって勝利を得んとする十三篇『孫子』らの兵学は、士気の系統の気を説く。彼らは天人相関を否定する以上、望気の系統の気を肯定することはあり得ない。

このため、『六韜』において士気と望気との二系統の気が混在している現象が見られることは、『六韜』中に天人相関思想と、天人相関に対立する天人分離思想とが、混在していることを示している。

『六韜』において、天人相関思想と天人分離の思想とが混在していることについては、既に浅野裕一氏が『六韜』の成立の問題と合わせて、詳細な考察を加えている。そこで、先ずその浅野氏の説の概要を述べる（注3）。

浅野氏によれば、「殷周革命前後、太公望呂尚

が周の文王・武王に対し、兵法及び治国の策を説く体裁を取る」現行本『六韜』は、内容的に見て全くの仮託である。そして、『漢書』芸文志が道家類に著録する「太公」二百三十七篇の中枢は、恐らく「金匱」及び「六韜」と称される部分からなり、その成立は、前漢からさらに戦国期まで溯らせることが可能である。もっとも、漢代の「六韜」と現在伝わる『六韜』とは、名称は同じでも内実は相当異なるとしなければならず、後漢以降「太公」が散佚した後、「太公」内に収められていた諸篇を材料として、戦国期以来著名であった「六韜」の形式を承けつつ、六朝人が新たに編集し直したものが、今本『六韜』であると浅野氏は指摘する。

また浅野氏は、『六韜』に見える天人相関の様相について考察を加え、『六韜』中強烈な天人相関が説かれている資料を二つの系統に分類する。すなわち、一つは、四時の推移を理法化した上で、君主の為政をそれに対応させんとする傾向を示すもの、すなわち前漢初期に大流行した黄老道の中の特に黄帝書の影響を強く受けた系統のものである。そして、もう一つは、卜筮・天官・時日・陰陽・五行・向背・雲気観望・吹律聴声などを包括する、陰陽流兵学に属する系統のものである。

しかし、『六韜』中にはそうした天人相関思想を背景とする資料が存在するだけではない。そこには、黄老道や鄒衍に代表される天人相関思想を痛烈に批判して、人事の重要性を強調する天人分離の主張が見出しうることを浅野氏は指摘する。

その上で、『六韜』中に天人相関と天人分離とが同居する原因について、『六韜』中の天人分離思想が「天人相関を排撃せんとする確固たる自覚に基づいている」以上、両者が「連続性を保ちつつ、一個の体系を構成していたと見ることは、やはり不可能」であるとする。従って、『六韜』中の天人相関思想と天人分離思想とは、本来別系統の資料であったことは確定的であり、今本『六韜』は成立事情の異なる諸篇を雑輯し

たものであり、そのために天人相関と天人分離との同居が生じた、と浅野氏は述べる。

以上の浅野氏の説に従えば、そもそも現在の『六韜』が成立する過程において、全くその思想的立場が異なり相対立する二つの兵学が混在している以上、前章で見たように『六韜』において士気の系統の気と望気の系統の気とが混在していることも、何ら不思議ではない。

また、前章で触れたように、『六韜』中望気の気を説く資料の中には、わずか一例、しかも佚文ではあるものの、望気そのものを否定せんとする人事重視の立場からのものと見られる資料9が含まれていた。この点から見ても、現行本『六韜』の成立に関する浅野氏の説は、説得力がある。

しかしながら、気について見た場合、二つの系統の気の間に何らかの連続性が考えられていたとの可能性をすべて否定することはできない。というのも、先に検討した士気の系統の気を説く資料3と、望気の系統の気を説く資料7とは、共に龍韜中の兵徴篇に含まれているからである。同一篇中に士気の系統の気と望気の系統の気とが連続して説かれる場合が存在することから見れば、部分的にではあっても、両系統の気を何らかの形で結合せんとする思考が存在した可能性が考えられる。

そこで次章では、この兵徴篇を取り上げ、そこに何らかの形で二つの系統の気、或いは天人相関と天人分離とを連続させる意図が認められるかどうかということについて、検討を加えることにする。

第三章　兵徴篇における天人相関と天人分離と

先ず兵徴篇の全文を引用し、その全体の構成などについて検討を加えることにする。

(12) 武王　太公に問ひて曰く、「吾　未だ戦はずして、先に敵人の強弱を知り、予め勝負の徴を見んと欲す。之を為すこと奈何。」

と。太公曰く、「勝負の徴は、精神先ず見はる。明将之を察す。其の効(しるし)は人に在り。謹んで敵人の出入・進退を候(うかが)ひ、其の動静・言語・妖祥・士卒の告ぐる所を察す。凡そ三軍説懌し、士卒　法を畏れ、其の将命を敬ひ、相ひ喜ぶに敵を破るを以てし、相ひ陳ぶるに勇猛を以てし、相ひ賢とするに威武を以てするは、此れ強の徴なり。三軍数しば驚き、士卒斉はず、相ひ恐るるに敵の強きを以てし、相ひ語(つ)ぐるに不利を以てし、耳目相ひ属し、妖言止まず、衆口相ひ惑ひ、法令を畏れず、其の将を重んぜざるは、此れ弱の徴なり。三軍斉整して、陳勢以て固く、溝を深くし塁を高くし、又た大風甚雨の利有り、三軍故無くして、旌旗　前指し、金鐸の声　揚りて以て清く、鼙鼓の声　宛として以て鳴るは、此れ神明の助けを得て、大勝するの徴なり。行陳固からず、旌旗乱れて相ひ繞(まと)ひ、大風甚雨の利に逆らひ、士卒恐懼し、気絶えて属(つつ)かず、戎馬驚奔して、兵車軸を折り、金鐸の声　下りて以て濁り、鼙鼓の声　湿りて沐するが如きは、此れ大敗するの徴なり。凡そ城を攻め邑を囲むに、城の気、色　死灰の如くんば、城屠る可し。城の気　出でて北すれば、城克つ可し。城の気出でて西すれば、城必ず降る。城の気出でて南すれば、城抜く可からず。城の気出でて東すれば、城攻むる可からず。城の気出でて復た入らば、城主逃北す。城の気出でて我が軍の上を覆わば、軍必ず病む。城の気出でて高くして止まる所無きは、兵を用ふること長久。凡そ城を攻め邑を囲むに、旬を過ぎて、雷あらず雨ふらざれば、必ず亟やかに之を去れ。城必ず大輔有り。此れ攻む可きを知りて攻め、攻む可からずして止む所以なり。」と。武王曰く、「善いかな。」と。

先ず、兵徴篇の全体の構成を確認しておく。兵徴篇の構成は、「未だ戦はずして、先に敵人の強弱を知り、予め勝負の徴を見んと欲」する武

王による、「之を為すこと奈何」との問いに対し、太公が回答し、その回答を聞いた武王は「善いかな」と満足する、というものである。

それでは、太公は、「敵人の強弱」や「勝負の徴」は予知し得るとしているのであろうか。冒頭において「勝負の徴は、精神先ず見はる。明将之を察す」と述べられていることから明らかなように、太公の基本的立場は、戦う前に「精神」にあらわれるところの「勝負の徴」を観測することできる、とするものである。

この「予め勝負の徴を見」ることができるとする回答は、一見すると陰陽流兵学的なものとの印象を与える。しかし、続く太公の発言を見るならば、そうとは言い難い。太公は、「其の効は人に在り。謹んで敵人の出入・進退を候ひ、其の動静・言語・妖祥・士卒の告ぐる所を察す」と、あくまでも「人に在」るものを察することによってこそ勝敗が予知し得る、と主張する。また、敵軍の「強の徴」及び「弱の徴」の内容は、兵士たちが軍法を畏れているか否か、或いは将軍を敬っているか否かといった、人事こそが判断の材料とされており、そこには神秘的内容が一切含まれていない。こうしたことから、太公はあくまでも人為の重要性を説いており、むしろ天人分離の立場に立つ兵学から回答していると理解することができるのである。

人事を尽くすことによって勝利を得んとする立場に立つ兵学の代表である十三篇『孫子』行軍篇では、「夫れ惟だ慮り無くして敵を易んずる者は、必ず人に擒にせらる」と、敵軍の状況について詳しく情報を得るべきこと、そして様々な現象がどのような敵軍の状況を意味しているのかということについて説かれている。「彼を知り己を知らば、勝乃ち殆からず」（地形篇）と、勝利を得んとするならば自軍の状況のみならず敵軍の状況についても知らねばならないとする十三篇『孫子』において、敵の状況についての観測や情報収集の必要性が説かれているのは当然のことといえるのだが、『六韜』龍韜の兵徴篇において、「明将」は「敵人の出入・進退を

候ひ、其の動静・言語・妖祥・士卒の告ぐる所を察す」べきとの太公の主張は、そうした十三篇『孫子』の立場と同じと考える。

また十三篇『孫子』九地篇では、自国の軍隊が敵国奥深く進入する場合、「祥を禁じ疑を去」るべきことが説かれている。危険に直面した兵士たちは、とかく迷信や神秘的な事象に左右され、軍規を重視せず、将軍の指揮に従わぬ事態に立ち至りかねないのだが、そうした軍隊は勝利を得られないとの認識に十三篇『孫子』は立つ。特にこの点についても、太公が「妖言止まず、衆口相ひ惑」うのは敵軍の「弱の徴」であるとする点は、十三篇『孫子』と一致するものと見なすことができよう。

このように、太公の発言中「未だ戦は」ざる時点で敵軍の様子を観測し、敵軍の兵士の行動などからその強弱を判断せんとすることを説く部分は、十三篇『孫子』の立場と何ら異ならない。にもかかわらず、続く太公の発言の「大勝するの徴」或いは「大敗するの徴」が説かれる部分では、陰陽流兵学の要素を見出すことができる。すなわち、「金鐸の声　揚りて以て清く、鼙鼓の声　宛として以て鳴るは、此れ神明の助けを得て、大勝するの徴なり」、「金鐸の声　下りて以て濁り、鼙鼓の声　湿りて沐するが如きは、此れ大敗するの徴なり。」との部分では、金鼓の音から勝敗を予言せんとすること、つまり聴声が説かれており、加えて「神明の助け」を得るか否かが勝敗の重要な要因と位置づけられている。こうした点は、人事重視の兵学ではなく、むしろ陰陽流兵学に基づく発言と考える。

太公の回答中に陰陽流兵学に基づく発言が含まれていることは、回答の最後の部分、「凡そ城を攻め邑を囲むに、城の気、色　死灰の如くんば、城屠る可し」以下の攻城戦に関する発言に端的に表われている。ここでは、先にも述べたように、気の色彩やその移動の方向などによって戦闘の結果を予知し得るとする、典型的な望気が説かれているのである。

もっとも、「大敗するの徴」の中に、敵軍が「旌

旗亂れて相ひ繞（まと）」ふことが含まれている点については、十三篇『孫子』行軍篇にも「旌旗動く者は乱るるなり」といった、旌旗の観測に基づき敵軍の状況を察知するものが含まれている。また、問題にしている気について、兵徴篇では「大敗するの徴」として「士卒恐懼し、気絶えて属（つ）かざる状況が挙げられているのであるが、ここでの気は、十三篇『孫子』における気、例えば九地篇において、兵士たちを「往く所無き」状況に陥れて必死の戦闘を行わせるべく、敵国の領内深く侵入する際に「謹み養ひて労する勿く、気を并せ力を積」まなければならない、と説く場合の気、或いは『孫臏兵法』における気、例えば延気篇において、将軍が「気を厲（はげ）ま」したり「気を断」じたりしなければ、兵士たちが「懾（おそ）れ、また「専らならずして散り易」くなり、「難に臨ん」だ時に必ず敗れてしまうとされる場合の気と同じく、兵士たちの士気を指すと考える。従って、旌旗や気についての太公の発言だけを取り出してみるならば、人事重視の兵学に基づく発言と内容的にさほど異ならないと言える。

以上のように、兵徴篇における太公の発言は、その基本的な思想的立場が一貫せず、天人分離の立場と天人相関の立場とが混在しているものとなっている。もちろん、前章で見た資料９のように、どちらか一方の立場から他方を批判するために引用或いは要約が行われているのであるならば、一篇中に天人分離の立場と天人相関の立場が共に説かれることは当然起こり得る。しかし、兵徴篇ではそうした引用もしくは要約が行われておらず、二つの立場が連続的に説かれているのである。

もとより、浅野氏が指摘するように、『六韜』中に天人相関と天人分離とが同居している原因が、本来別系統の文献であったものが後世編集し直されたためであるならば、兵徴篇に両系統の気が同時に見られるのも、本来別系統の文献に属する資料が後世の再編集によって一篇中に併せられた可能性自体は確かに考えらる。

しかしながら、兵徴篇が、士気の系統の気と望気の系統の気とを、何らかの形で結合せんと努力する立場で書かれた可能性も考えられないわけではない。このことは、特に「大敗するの徴」において、「金鐸の声　下りて以て濁り、鼙鼓の声　湿りて沐するが如」くであること、つまり陰陽流兵学が説く聴声による状況判断と、「気絶えて属か」ざること、すなわち人事重視の兵学が説く士気のあり方についての判断とが、並列されていることから窺えよう。また、先にも触れたように、兵徴篇は篇全体として、かなり緊密な構成になっている。すなわち、武王の問いに対して、太公は先ず「勝負の徴は、精神先ず見はる。明将之を察す」と、「先に敵人の強弱を知り、予め勝負の徴を見ん」とすること自体が可能であることを告げ、更に「其の効は人に在り」と、その基本的手段が敵兵に対する観察であることを述べる。その上で、具体的に敵人の「強の徴」「弱の徴」が如何なるものであるのか、更に「大勝するの徴」「大敗するの徴」が如何なるものであるのかを、それぞれ説明している。こうした緊密な構成から見て、兵徴篇は全体として一つの構想のもとに編纂されている可能性が高く、従ってそこで士気の系統の気と望気の系統の気とが、連続するものとして捉えられていたと考える（注4）。

そうであるとすれば、浅野氏が述べるように、『六韜』中の天人分離思想が「天人相関を排撃せんとする確固たる自覚に基づいている」ため、天人分離の立場が天人相関的思考を取り入れたとは考え難い。従って、兵徴篇では、基本的に天人相関の基づく陰陽流兵学の立場に立ちつつ、そこに天人分離の人事重視の思考が取り入れられて折衷されている、と捉えるべきではなかろうか（注5）。

そもそも、士気の系統の気と望気の系統の気とは、本来的には同一の気の思想から分離して発展していったと考える（注6）。すなわち、『国語』周語に見られるような、周の史官らによって成立した気の思想においては、気は宇宙のあ

らゆる現象を構成するものであった。そこで気は、人間の身体内部においては、その精神的活動とも密接に関わるものであり、同時に天地自然の間にあっては、様々な現象を構成するものでもあり、また史官らによって観測されるものであった。そして、士気の系統の気及び望気の系統の気は、いずれもそうした史官らの気の思想から発展して分離したのであろう。従って、そうした気の思想の展開を踏むならば、両系統の気を再び統一的に捉える立場が成立する余地は十分あった。

もっとも、仮に兵徴篇が、陰陽流兵学的要素の中に士気の系統の気を取り込んでいるものであったとしても、士気の系統の気と望気の系統の気との関係について、直接的には何も言及されておらず、このため両者の関係は結局不明のままである。従って、どの程度両系統の気を結合せんとする意図があったのかは、十分な資料が存在しないために、にわかには判断し難く、依然として未詳であると言わざるを得ない。

しかし、そうした両系統の気をいわば折衷せんとする立場がもし戦国期に存在したとするならば、これは気の思想史的展開上、重要な問題である。そこで次章では、銀雀山漢墓出土竹簡本を取り上げ、仮に兵徴篇が二系統の気を結合せんと意図したものであったとしたならば、そうした思考を果たして戦国時代において確かに存在したと考えてよいのか、という問題について検討する。

第四章　竹簡本『六韜』における気と天人相関と

銀雀山漢墓から出土した竹簡本『六韜』は、景帝から武帝期までの前漢初期に書写されたものとされる。現行本『六韜』及びその佚文と重複する内容を持つこの竹簡本の出土によって、『六韜』を後世の偽作であるとする説は否定され、少なくとも現行本『六韜』の材料には、恐らくは戦国末期に既に成立していたものが含ま

れていることが判明した。そこで本章では、竹簡本『六韜』における気、及び天人相関思想と天人分離思想とについて検討し、前章で見た現行本の兵徴篇の如き両系統の気を結合せんとする思考が果たして戦国期に既に成立していたのかどうかについて考察する。

先ず竹簡本『六韜』における気についてであるが、第一章で検討した現行本『六韜』に見出し得る気は、いずれも竹簡本においては見出し得ない。これは、竹簡本『六韜』が現行本と比較して分量的にかなり少ないことにもよると思われる。しかし、竹簡本中、気が全く説かれていないわけではない。わずか一例ではあるが、次のような気の用例が見られる（注7）。

(13)……官治、其氣脩、王姑脩（修）身下賢、□須其時。」大（太）公(729)望曰、「四時無窮、人□(730)……

この資料については後述するが、殷周革命の際、殷に対し進撃するか否かについて周公旦と太公望とが武王の前で展開した議論の一部である。その中で、恐らくは周公旦の発言中に「其の気　脩す」との語句が登場する。この気が士気の系統の気であるか、それとも望気の系統の気であるかは、にわかには判断し難い。この資料の前後は竹簡本『六韜』における天人相関と天人分離との関係を考える上で重要な資料の一部でもあるので、続いて竹簡本における天人相関思想及び天人分離思想の検討に移り、その中で改めてこの気の性格について考察することにする。

竹簡本『六韜』において、天人相関或いは天人分離に関連すると思われる資料について、先ず現行本と重複するものについて見てみる。

(14)〈銀雀山本〉
文王再拜曰、
「敢毋受天之詔命乎。」
…

〈現行本〉
文王再拜、「允哉。敢不受天之詔命乎。」乃載與俱歸、立爲師

(15)〈銀雀山本〉
方冬甚寒、不能□凍

方夏甚暑、不能聚功
賢民羣居、國有大凶
數…
…奪之威。
息其明、因順其常。

(16)〈銀雀山本〉
文王問太公望曰、
「守國奈何。」
太公望曰、
「齋。
□□君天地之經、
四時之所生、
仁聖之道、
民機…
…面再拜曰、
「□【□□】地經、
四時之所生、
仁聖之道、
民機之情。」

無使人奪汝威。
因其明、順其常。

〈現行本〉
文王問太公曰、
「守國奈何。」
太公曰、
「齋。
將語君天地之經、
四時所生、
仁聖之道、
民機之情。」
王齋七日、
北面再拜而問之。

太公望曰、
「夫天生四時、
地【□】萬材。
天下有民、
…
…物生。
夏道長、【□□□】
□道實、萬物盈。
冬大藏、…
…則復起。
反其所終始、
莫…
…爲天地□…
…和之。
至道然。
故仁聖之在天…
…矣。

太公曰、
「天生四時、
地生萬物。
天下有民、
聖人牧之。
故春道生、萬物榮。
夏道長、萬物成。
秋道斂、萬物盈。
冬道藏、萬物靜。
盈則藏、藏則復起。
知所終、莫知所始
聖人配之、
以爲天地經紀。
故天下治、仁聖藏、
天下亂、仁聖昌。
至道其然也。
聖人之在天地間也、
其寶固大矣。

故因其恆常、
示之所明、□…
…動而爲機、
機動而得失爭矣。

(17)〈銀雀山本〉
對曰、
「王其修身、下賢、
惠民、以觀天道。
天道无殃、不可先倡。
人道无災、不可先謀
必見其殃、又見其災
乃可以謀。
必見其外、又見其內、
乃知其遂。
必見其陽、又見其陰、
乃知其心。
必見其人、又見其親
乃知其情。
行其道、可致也。
從其…

因其常而視之、
則民安。
夫民動而爲機、
機動而得失爭矣。

〈現行本〉
太公曰、
「王其修德、以下賢、
惠民、以觀天道。
天道無殃、不可先倡。
人道無災、不可先謀。
必見天殃、又見人災、
乃可以謀。
必見其陽、又見其陰、
乃知其心。
必見其外、又見其內、
乃知其意。
必見其疏、又見其親、
乃知其情。
行其道、道可致也。
從其門、門可入也。

…□可成也。
爭強者、爭勝者也。
全勝可得。
全勝不鬪、大兵无創
與鬼神通。微哉。

(18)〈銀雀山本〉
…之如何。」
太公望曰、
「天有恒形、民有常生
與天下同生、
而天下靜矣。
太上因之、其次化之。
夫民化…

…□无以予之而自當
是謂順生。
以此角聖人之□□□…

立其禮、禮可成也。
爭其強、
強可勝也。
全勝不鬪、大兵無創。
與鬼神通。微哉微哉。

〈現行本〉
曰、「靜之如何。」
太公曰、
有常形、民有常生。
與天下共其生、
而天下靜矣。
因之、其次化之。
民化而從政。
是以天無爲而成事、
民無與而自當。

此聖人之德也。」

これらはいずれも、基本的に天人相関思想を説くものである。すなわち、文王が太公望と出会い彼をその師とすることは、「天の詔命を受」

けることに他ならない（資料14）。また君主たるべき者は、その務めとして「天地の経、四時の生ずる所、仁聖の道、民機の情」（資料16）を規範としなければならないとされ、「王は其れ身を修め、賢に下り、民に恵みて、以て天道を観る。天道殃ひ无ければ、先倡す可からず。人道災ひ无ければ、先謀す可からず」（資料17）と、君主が「天道」や「人道」をよく観察し、それらに従って政治を行うことが要請されている。もとより、そうした君主にとっての規範には、「天には恒の形有り、民には常生有り」（資料18）と説かれることから明らかなように、恒常性が認められている。そしてそうした恒常性を有する規範に従って政治を行うこと、つまり「其の恒常に因り、之が明らかなる所を示」すこと（資料16）或いは「其の明に息ひ、因りて其の常に順ふ」こと（資料15）こそ、君主にとって不可欠とされている。

こうした竹簡本において認められる天人相関は、いずれも浅野氏が指摘する「前漢前期に大流行した黄老道の中、特に黄帝書側の特色と一致」すると言え、馬王堆出土の帛書における「天地に恒常有り、萬民に恒事有り」（『経法』道法）などの表現や内容と、極めて近い。

以上、竹簡本『六韜』において、天人相関或いは天人分離に関連すると思われる資料について、先ず現行本や佚文と重複するものについて見てみた訳だが、それらはいずれも天人相関を説くものであり、特に太公望の発言については、皆黄老道的立場からのものであった。

この点に関して特に注目されるのが、先に見た竹簡本『六韜』中唯一の気の用例である資料13を含む次の資料である。

（19）…前行已脩矣。今時可、臣固將言之。」

周公旦□(724)…

…□之□□。」太公望曰、「夫紂爲无道、忍(725)…

…百姓。君秉明徳而誅之、殺一夫而利天(726)下…

…之師、以東伐紂、至於河上。雨甚雷疾、

武王之乘黄震而死、旗折□□(727)…
（ア）…□正而后伐、故功可得而立也。意者我□□(728)…
（イ）…官治、其氣偖、王姑脩（修）身下賢、□須其時。」太公(729)望曰、「四時無窮、人□(730)…
（ウ）…故時無恒與、道无恒親、盈絀變化、天□□(731)…
（エ）…可、孰爲有天。夫天先□之、【□□□□】□之。
道先非之、而后天下叛之。今夫紂外失天下、内失(732)百姓。我秉明徳而受之、其不可、何也。夫以百姓而攻天下、可譁而舍乎。去必死、進必取□(733)…
（オ）…□今日行之。」大（太）公(734)…

先にも触れたように、これは殷に対し進撃するか否かについて、周公旦と太公望とが武王の前で議論を行った様子を記した資料である。浅野氏は、竹簡本のこの部分は、『通典』巻百六十二及び『太平御覧』巻三百二十八所引の佚文と「相当する内容を持つもの」であると指摘し、周公旦が天人相関を説き、それに対して太公望が周公旦を批判し天人分離を説いているとする（注８）。確かに、『通典』及び『太平御覧』所引の佚文においては浅野氏の指摘通りであるが、竹簡本のこの部分は周公旦と太公望との議論であることはほぼ間違いないものの、『通典』及び『太平御覧』所引の佚文と表現・内容ともかなり異なっており、重複がほとんど見られない。このため、竹簡本でも周公旦が天人相関を説き、それに対して太公望が天人分離を説いているとは解釈しがたい点がある。

この点を明らかにするために、先ず資料19のそれぞれの発言者について検討してみよう。銀雀山漢墓竹簡整理小組の注〔八〕及び〔一三〕では、資料19の（ア）は周公旦の発言、（イ）の後半「四時窮まり無く、人□…」から（オ）の前半「…□今日之を行う」はすべて太公望の発言としている。

（ア）については注〔八〕が指摘するように、

「功　得て立つ可」くするためには「后に伐」つべきと、進撃中止を進言する内容であることや、『太平御覧』巻三百二十九所引の佚文や『楚辞』天問の洪興祖の補注が引く佚文中の周公旦の発言に共通している「意者」の語から見て、やはり周公旦の発言である可能性が高い。また（イ）の前半の先に資料13として引いた部分は、後半の発言が太公望のものである以上、恐らくは周公旦のものであろう。（ウ）については、後に取り上げるとして、（エ）は特に「我　方に明徳ありて之を受く、不可なること如何ぞ。」との部分が、やはり周公旦と太公望とが武王の前で議論する『太平御覧』巻十三所引の佚文中の太公望の発言「君　徳を秉りて之を受く。不可なること如何ぞ」とよく類似しており、また周公旦が進撃中止を武王に勧めるのに対して「百姓を以て天下を攻」め「進」まんと主張する内容であることから見て、やはり太公望の発言と考えられる。もっとも、（オ）の前半「…□今日之を行う」は、明らかに続いて発言している太公望以外の人物の発言であり、これは恐らくは周公旦のものである。

もとより、資料19は残簡であり、その内容の全体は把握し難いが、それぞれの発言の主体が以上のようであるとすれば、それぞれの思想的立場はどのようなものと考えられるのであろうか。

先ず周公旦であるが、資料13としても引いた（イ）の前半部で、気が説かれている部分に続いて「其の時を須」つべきことを説いていることから見て、気の観測を行いそこから王の為すべきことを判断しているかのようである。もっとも、ここでの気は両系統のいずれについても当てはまり、どちらとも判断し難いが、『通典』巻百六十二・『太平御覧』巻三百二十八・十三篇『孫子』始計篇杜牧注などが引くところの武王の前での周公旦と太公望との議論では、周公旦の立場がいずれの場合も天人相関の立場であることから考えて、ここでも周公旦は天人相関の立場に立って発言しているものと推測される。

従って、その中で説かれる気は、望気の系統の気である可能性が高い。

それでは、太公望の立場はどうであろうか。（イ）の後半の太公望の発言で「四時」の運行に言及していることから、その思想的立場は先に見たような「天道」の推移に従うべきとする黄老道的天人相関の立場に立つものであることが窺われよう。このことは、（エ）において、「道先に之を非として、后に天下之に叛く」と、「天」或いは「道」が人為の規範として機能することが説かれていることからも、確認できよう。（ウ）については、その発言者が誰か判然としないが、「恒に与する无」き時や、「恒に親しむ无」き「道」に対して、その「盈絀変化」を見極めて従うべきことを人間に要請しているものと考えられるその内容からみて、これはやはり黄老道的天人相関を説くものであって、やはり太公望の発言であると推測する。

以上のように見るならば、周公旦も太公望も共に天人相関の立場に立つことになるが、明らかに両者の間には性格の違いが存在する。すなわち、太公望の「四時」「天」「道」に従うべきとする主張は、浅野氏の指摘する黄老道的な天人相関からのものに該当する。これに対して、周公旦は、望気の系統の気を説き、陰陽流の兵学の立場からの発言を行っているのではないか、と考えられるのである。

従って、竹簡本のこの部分は、確かに『通典』や『太平御覧』に引かれた佚文と類似しているけれども、周公旦が天人相関を説くのに対して太公望が天人分離を説くものではなく、太公望は黄老道的立場から、周公旦は陰陽流兵学の立場からそれぞれ発言しているのではなかろうか。

以上のように、竹簡本においては、太公望が黄老道的立場から天人相関を説いていると見られる資料が多く、基本的に黄老道的な天人相関の立場を中心にしているといえる。このことは、次に挙げる資料からも窺える。

（20）…□罷天之度、臣有三勸…

この資料は断簡であり、天人相関・天人分離

いずれの立場のものか判然としないが、「天の度」との表現は、「主　度を執りて、臣　理に循ふ者は、其の国　霸昌なり」（『経法』、六分篇）「日月星辰の期、四時の度、動靜の位、外内の處は、天の稽なり」（同、四度篇）「四時の度に順はざれば而ち民疾む」（同、論篇）「適とは、天の度なり。信とは、天の期なり」（同、論篇）などの黄帝書における表現及び内容を彷彿とさせるものである。

しかしながら、実は竹簡本『六韜』中には、天人相関を否定し人事を重視せんとする立場からの主張が見られるものも存在する。

(21) 大（太）公望曰、「蒼蒼上天、莫知極。霸王之君、孰爲法則。」

この資料における「蒼蒼たる上天は、極を知る莫し。霸王の君、孰か法則と為さん」との太公望の発言は、明らかに天に人為の規範を求めて「法則と為」さんとする立場を否定するものである。そしてこれは、「禍福は君に在りて、天時に在らず」（文韜・盈虚）「天道鬼神、之を視れども見えず、之を聴けども聞こえず、之を索むれども得ず」（資料9）「天道鬼神、之を視れども見えず、之を聴けども聞こえず。智将は法らざるも、愚将は之に拘る」（資料10）といった、天人分離を説く現行本『六韜』及び佚文の内容と基本的に合致する。

従って、竹簡本『六韜』には、天人相関と天人分離とがやはり併存しているとしなければならない。そうした現象は、決して現行本『六韜』及び佚文にだけ見られるのではなく、恐らくは戦国期に既に存在したその材料の段階から、既に起きていたと推定する。

ここから、現行本において天人相関と天人分離とが同居する原因について、本来成立事情の異なる別系統の諸文献を雑輯したためであったとする浅野氏の推論は、現行本だけではなく竹簡本にも当てはまると言えよう。『六韜』は、そうした雑輯としての性格を戦国期から有していたからこそ、六朝期の再編集を経てもそうした性格が依然として残ったと考えられるのである。

それでは、竹簡本において、例えば現行本の兵徴篇のごとく、天人相関と天人分離とを何らかの形で結合せんとする思考は見出し得るだろうか。残念ながら、そうした思考の存在を窺わせる資料は竹簡本には見られない。従って、現時点では、兵徴篇の如き思考が戦国期に確実に存在したことを裏付ける資料は他にないといわざるを得ない。

もとより、竹簡本は現行本と比較して分量的に少なく、また断簡も多い。そうした資料的制約が竹簡本にある以上、そこに天人相関と天人分離とを結合せんとする思考が見出し得ないからといって、そうした思考自体が戦国期に確実に存在しなかったとは言えまい。竹簡本『六韜』の成立の事情については現時点では明らかではないけれども、竹簡本が同一文献中に天人相関と天人分離とを併存するものとして戦国期に既に成立していたことから見て、その編纂の段階において、天人相関と天人分離と、或いは士気の系統の気と望気の系統の気とを連続的に捉えんとする意図とが存在した可能性があると見る。

その場合、先にも述べたように、天人分離の側が天人相関に対する敵意を露わにしていたことを考えるならば、基本的に天人分離の立場に立ちつつ、そこに天人相関を組み込むといった形で、全体として或る一定の体系を構成するとの可能性が成立する余地は無い。十三篇『孫子』や『孫臏兵法』、『尉繚子』などが士気の系統の気を説きつつ、望気の系統の気を一切説かないことも、そのことを裏付けるものである。

これに対して、基本的に天人相関の立場に立ちつつ、そこに或る一定の天人分離的発想を組み込み、人事の重要性をも同時に説くといった形で、全体的な体系を構成するとの可能性は、理論的には成立し得よう。すなわち、古代中国の思想界にあって中心的思潮を形成していた天人相関思想に対して、春秋後期以降次第に力を増してきたとはいえ、天人分離を説く勢力は少数派であった。しかし、この天人分離派は天人相関思想に対して鋭い批判を加え、無視できな

い情勢が生じた。そこで、そうした批判に対抗すべく、天人相関の基本的立場に立ちながら、人事の重要性をも同時に説く形で巧みに天人分離的思考を折衷する試みが存在したことは、十分考えられるのである。そして、まさに兵徴篇において士気の系統の気と望気の系統の気とが併存している現象は、そうした天人相関と天人分離との結合であったと見なすことができるのである。

結　語

本稿では、『六韜』において併存していた、士気の系統の気と望気の系統の気との、二つの系統の気すなわち〈気の二元性〉について考察を加え、現行本『六韜』龍韜の兵徴篇では両系統の気が共に説かれており、そこからは両系統の気をいわば折衷せんとする思考の存在が窺われたこと、そして断定するに足る十分な資料には欠けるが、兵徴篇において見られたような形で二系統の気を結合せんとする思考が戦国期に存在した可能性は否定できず、逆に十分に存在し得た可能性があることを述べた。

こうした両系統の気の折衷が戦国期に存在したとするならば、気の思想的展開上、それは史官らが成立させた気の思想から分離し展開していった士気の系統の気と望気の系統の気とを、再び統一的に捉えんとする方向のものと位置付けることができる。

もとより、『六韜』における気の検討だけでは、そうした気の思想的展開の解明には十分ではないが、両系統の気の結合が戦国期におこなわれた可能性があることは、基本的に強烈な天人相関思想の立場に立つ『墨子』において、望気の系統の気が説かれると共に、断片的ながら士気の系統の気が説かれていることからも窺うことができる。こうした『墨子』などの他の諸文献における〈気の二元性〉についての検討は、今後の課題としたい。

注

1　拙稿「兵家の気の思想について――「孫氏の道」を中心に――」（「集刊東洋学」第七十二号、一九九四年）参照。

2　『六韜』の引用は、基本的に武経七書本により、佚文の引用は、孫同元輯『六韜佚文』による。

3　以下、『黄老道の成立と展開』（創文社、一九九二年）所収の「『六韜』の兵学思想――天人相関と天人分離――」（初出は『島大国文』第十号、一九八〇年）参照。

4　但し、太公の発言の最後にある望気を説く部分は、武王の問いが特に状況を想定していないのに対して、攻城戦のみに状況を限定している。このため、それまでの発言との連続性をいささか欠くように見受けられ、この点は再編集の痕跡と捉えることも可能である。

5　第1章で見た資料9は、人事重視の立場から陰陽流兵学の望気について引用し、それを批判するものであった。これは、人事重視の兵学に立ちつつ、士気の系統の気と望気の系統の気を折衷することが不可能であったことを示している。

6　拙稿「『国語』周語における気」（大阪大学文学部中国哲学研究室「中国研究集刊」荒号、一九八九年）、「気の思想の成立――『国語』における気を中心に――」（「新潟大学教育学部紀要」第三二巻第二号、一九九一年）、「『左伝』における気の思想――『国語』における気の思想との比較を中心に――」（新潟大学東アジア学会「東アジア――歴史と文化――」第二号、一九九三年）、及び注1前掲「兵家の気の思想について――「孫氏の道」を中心に――」参照。

7　以下の銀雀山漢墓出土竹簡本の引用は、銀雀山漢墓竹簡整理小組編『銀雀山漢墓竹簡〔一〕』（文物出版社、一九八五年）による。但し、その一二五頁の注〔一〕によれば、本

書に収められた竹簡以外にも、字体や内容から見て『六韜』の残簡である可能性のあるものが銀雀山漢墓からは出土しているとのことであるが、それらは『六韜』の一部であるとの確証に欠けるため、第三輯（未刊）に収められる。ここでは、銀雀山漢墓竹簡整理小組の判断に従い、一応『六韜』の一部と判定されたものについて取り上げることにする。

8　注3前掲『『六韜』の兵学思想――天人相関と天人分離――』参照。